2010年度
総括と展望

ユニット１（南アジア地域班）研究実績

ユニットリーダー
若原雄昭

1. 本年度の研究目標

① 仏教を含むインド伝統思想全般における「ダルマ(法)」概念の変遷を跡付け、植民地時代を経て現代に至るまで、社会的・政治的危機に際して常に顧みられ、新仏教徒の指導者アンベードカルが特に重視した、ダルマの意味を探求する。
② アンベードカルは、反英独立運動のなかで、ガーンディー指導下に再生を図ったヒンドゥ思想と社会に対抗して、不可触民の抵抗運動を基盤に仏教への改宗という形で独自のインド社会の再生を考えた。この二人の対立を軸に、アジアの思想と社会の現代世界における意味と可能性を考える。本年は特に 1920 年代におけるアンベードカルの反カースト運動を研究する。
③ 2009 年インド連邦下院総選挙結果と被抑圧民の政治参加状況の研究を行う。
④ タミル・ナードゥ州農村における社会変動（1967 年以降）に関する調査を実施する。
⑤ バングラデシュを中心としたベンガル仏教徒に関する基礎的情報（沿革・分布・人口・組織等）の収集と整理を行う。
⑥ 現代スリランカ社会、および現代タイ社会における上座部仏教教団・仏教徒社会の諸相と実践の動態を調査・研究する。

2. 研究実績

「本年度の研究目標」記載の各項目①～⑥について、以下に本年度の研究実績を記す。

2.1 項目①

「仏教を含むインド伝統思想全般における「ダルマ（法）」概念の変遷を跡付けるとともに、新仏教徒の指導者アンベードカルが特に重視したダルマの意味を探求する。」という点について。

桂は、最新の研究成果を含む「ダルマ（法）」研究に関する情報の蓄積につとめる一方で、小林久泰氏（東京教育大学研究員）の協力のもとに、近年の国際的なダルマ研究を要約し紹介するワーキングペーパー「「ダルマ」に関する最新の研究成果（１）」を作成、既に Web 公開済みである。また、**桂**は、構想調書で平成 24 年度に実施予定の「インド認識論・論理学・言語哲学」研究に関する複数のユニット 1 研究会（第 2 回フライブルグ大学孔子学徳方院長 Haiyan Hu-von Hinüber 博士報告会；第 3 回オーストリア科学アカデミー専

任研究員・ウィーン大学講師 Horst Lasic 博士報告会；第 5 回ニューメキシコ大学教授 John Taber 博士報告会；第 7 回オーストリア科学アカデミー／アジア文化思想史研究所所長・ウィーン大学チベット学仏教学科講師 Helmut Krasser 博士報告会；第 8 回オーストリア科学アカデミー／アジア文化思想史研究所研究員 Anne MacDonald 博士・ヴァージニア大学宗教学科博士課程修了 Alberto Todeschini 博士報告会；第 9 回マクマスター大学社会科学部宗教学科准教授 Shayne Clarke 博士報告会）を、本年度に前倒しの形で実施し、計画年度において速やかに成果が出る準備状況を整えた。

若原は、アンベードカルの主著 *The Buddha and his Dhamma* に見られる仏教理解を批判的に検討することを通して彼のダルマ観を考察するワーキングペーパーを準備している。

岡本は、インドにおいて多様性を受け入れつつ統一帝国を維持し、その統治理念の中心に「ダルマ」を掲げたアショーカ王をテーマとするワーキングペーパー「アショーカのダルマ」を作成し Web 公開した。

2.2 項目②

「1920 年代におけるアンベードカルの反カースト運動の研究」について。

長崎は第 4 回ユニット 1 研究会において、若原・岡本による報告「インド・バングラデシュの仏教徒コミュニティ調査報告」ならびに佐藤智水（BARC ユニット 3 長）・志賀が行った「南インドのダリット／仏教徒の生活実態調査報告」に対するコメンテーターをつとめ、現代インドにおいてアンベードカル仏教を旗印に活動する二つの組織についての報告を分析し、詳細なコメントを提示した。また、第 6 回ユニット 1 研究会において、南アジアを中心として構築されつつある仏教徒間のネットワークを報告した中村の「スリランカ調査報告／世界仏教徒大会に出席して」においても、同様にコメンテーターとして出席し、アンベードカル仏教との関わりについてディスカッションを行った。

志賀は、2010 年 10 月に、佐藤智水ならびに榎木美樹（BARC 公募研究員・JICA インド事務所企画調査員）とともに、インド・カルナータカ州にて改宗仏教徒の生活実態および政治社会活動に関する調査を実施した。その報告は、第 4 回ユニット 1 研究会において、佐藤智水とともになされた「南インドのダリット／仏教徒の生活実態調査報告」に該当する。また、**志賀**は、同研究会において、インド・ウッタルプラデーシュ州でアンベードカルをシンボルの一つとして位置づける政党「大衆社会党」（Bahujan Samaj Party：BSP）について報告した若原・岡本による「インド・バングラデシュの仏教徒コミュニティ調査報告」に対するコメンテーターもつとめ、BSP 関連施設において行われる仏教教育の教材に、仏教思想というよりも、アンベードカルの思想が色濃く見出せる点を指摘した。

2.3 項目③

「2009 年インド連邦下院総選挙結果と被抑圧民の政治参加状況の研究を行う。」という点について。

インドにおける被抑圧民の政治参加状況に関連して、**若原・岡本**は、**榎木美樹**とともに、T. Fitzgerald（英・スターリング大学助教授）ならびに S. S. Das（インド・ジャワハルラル・ネルー大学院生）の協力を得て、インド・ウッタルプラデーシュ（＝UP）州における仏教徒コミュニティの現状に関する調査を実施。首都デリー及び UP 州ラクノウ市を中心に、同

州でダリット／改宗仏教徒を支持基盤として政権を獲得した BSP の関連機関・施設（Gautama Buddha University、International Buddhist Research Institute、Babasaheb Bimrao Ambedkar University 等）を視察し、当該施設責任者及び BSP 幹部数名との面談・意見聴取を行った。今回は同州における改宗仏教徒の政治参加とそのコミュナルな背景の一端を垣間見るに留まったが、今後の本格的研究に必要なネットワーク構築のため確実な足掛りが得られた。その詳細は第 4 回ユニット 1 研究会の若原・岡本による報告「インド・バングラデシュの仏教徒コミュニティ調査報告」で報告された。

志賀は、アンベードカル主導のマハーラーシュトラ州におけるダリット解放運動とは異なった独自の性格を有する南インドのタミル・ナードゥ州における解放運動につき、関連資料の収集を行うとともに、2009 年に実施された第 15 回インド連邦下院選挙のタミル・ナードゥ州における結果を分析し、本選挙で初めてダリット政党が独立候補者を擁立し当選を果たしたことに着目し、ダリット政党が現代インド政治において存在感を強めていると解釈した。ダリットの躍進を可能にした政治社会的条件の変化については、次年度においても引き続き検討する。

2.4　項目④

「タミル・ナードゥ州農村における社会変動（1967 年以降）に関する調査」については、本年度において**中村**によって行われたスリランカ調査がこれと関連を持つ。**中村**は今回、世界仏教徒大会への参加を目的としてスリランカ出張を行い、その詳細を第 6 回ユニット 1 研究会にて報告した。現地スリランカにおいては複数の現地研究者と交流し、平成 23 年度（次年度）の研究計画に含まれる「タミル・ナードゥ州の農村からスリランカへの出稼ぎ労働の動態の研究」を視野に入れつつ行動した。次年度は、今回の研究出張による成果を含め、当該地域における社会変動との関わりを分析することになっている。とはいえ、今年度の成果としては未達成の箇所を多く含んでいる。

2.5　項目⑤

「バングラデシュを中心としたベンガル仏教徒に関する基礎的情報（沿革・分布・人口・組織等）の収集と整理」については、**若原・岡本**の二度にわたる調査（その内容は第 4 回ユニット 1 研究会及び岡本によるワーキングペーパー「バングラデシュ仏教の現状・調査報告」にて報告済み。）によって一定の成果が得られた。例えば、インド西ベンガル州 Kolkata においては、市内及び近郊にあるベンガル仏教徒の主要寺院六ヵ寺を訪問し、当該地域の仏教徒の実態に関する基礎資料収集を行った。この際、インド国内におけるベンガル仏教寺院および仏教徒のデータを掲載する最新資料（2010 年発行）を入手できた。また、その後に移動したバングラデシュでは、東南部（Chittagong, Cox's Bazar）における宗教事情に関する調査を、ダッカ大学 Dilip K. Barua 博士ならびにチッタゴン大学 Gyana Ratna 博士の協力のもとに行った。この際、同国仏教徒の本拠地である Chittagong および周辺地域における仏教徒人口・寺院数他の基礎的調査の具体的プランを、Chittagong 大学スタッフと協議した。

2.6　項目⑥

「現代スリランカ社会・現代タイ社会における上座部仏教教団・仏教徒社会の諸相と実

践の動態の調査・研究」について。

まず、第 1 回ユニット 1 研究会として「タイ仏教の現在」と題して、タイ国マハーニカーイ派ダンマカーイ寺院総住職補佐 Kongkarattanaruk Phrapongsak 博士による報告会を開催し、現代タイ仏教の布教や教育活動あるいはイスラーム教徒との軋轢などの実態についての詳細な報告をいただき、**中村**がコメンテーターとして参加し、ディスカッションを行った。

また、既述の通り、**中村**はスリランカへの研究出張を行い、現地研究者との交流を行い情報の収集を行った（詳細は第 6 回ユニット 1 研究会にて報告された。）。

嵩はタイへの研究出張を行い、バンコク郊外で 11 月 19 日～25 日に亘り開催された国際エンゲージドブディズムネットワーク（International Network of Engaged Buddhists: INEB）に出席、タイ各地で活動するエンゲージドブッディストと交流し、タイ国内の社会活動と伝統的仏教教団との関わりについて調査するとともに、ミャンマー、マレーシア、インドネシア、ラオスさらにインドの仏教徒グループのリーダーと交流を持つことができた（嵩の調査は、中村と同じく第 6 回ユニット 1 研究会にて「タイ調査報告／国際エンゲージドブディズムネットワーク（INEB）に出席して」と題して報告済み。）。今回は、中村・嵩によって、タイを含めた東南アジア諸国及びインド・スリランカで社会活動を行う仏教徒グループと各地域における伝統的仏教教団との関わりについて調査・研究をするための足がかりをつくることが出来た。引き続き収集した資料の分析を行うと共に、構築しつつあるネットワークを通じて研究を進めていく。

林は BARC 設立記念国内シンポジウム 「アジア仏教の現在 I 」にパネリストとして参加して詳細な報告を行うとともに、これまで行ってきたタイ上座部仏教に対する社会学的研究の成果の一端をワーキングペーパー「東南アジア大陸部地域における「タイ仏教」―現代アジア仏教の理解にむけて―」として Web 公開した。

３．ユニット１研究会リスト

第１回ユニット１（南アジア地域班）研究会

■報告者・報告題目

報告 1：タイ仏教の現在

報告者：コンカーラッタナラック・プラポンサック（Dr. Kongkarattanaruk Phrapongsak タイ国マハーニカーイ派ダンマカーイ寺院総住職補佐・長老／沼田研究奨励金受給者・仏教文化研究所外国人客員研究員）

報告 2：Tibet's Journey in Exile

報告者：ジクメー・ツルティム （Jigmey Tsultrim 中央チベット政庁チベット博物館館長／沼田研究奨励金受給者・仏教文化研究所外国人客員研究員）

■開催場所：西鬟大会議室

■開催日時：7 月 22 日（木）（16：00-19：00）

【コメンテーター】中村尚司／芳村博実（龍谷大学文学部教授）

第２回ユニット１（南アジア地域班）研究会

■報告題目：Faxian（法顯）'s Perception of India

■報告者：胡海燕・ヒニューバー（Dr. Haiyan Hu-von Hinüber フライブルグ大学孔子学徳方院長／沼田研究奨励金受給者・仏教文化研究所外国人客員研究員）

■開催場所：西黌大会議室

■開催日時：9 月 7 日（火）15:00～17:30

【コメンテーター】桂　紹隆

第３回ユニット１（南アジア地域班）研究会

■報告題目：Meditations on the Retrieval of Lost Texts: With Special Reference to the Sāṃkhya Section of *Pramāṇa-samuccaya* Chapter 2

■報告者：ホルスト・ラシック（Dr. Horst Lasic オーストリア科学アカデミー専任研究員・ウィーン大学講師/沼田研究奨励金受給者・仏教文化研究所外国人客員研究員）

■開催場所：西黌大会議室

■開催日時：9 月 24 日（金） 17:00～19:00

【コメンテーター】桂　紹隆

第４回ユニット１（南アジア地域班）研究会

共催：龍谷大学現代インド研究センター（南アジア調査報告会）

■報告題目 1：インド・バングラデシュの仏教徒コミュニティ調査報告

■報告者： 若原雄昭／岡本健資

■報告題目 2：南インドのダリット／仏教徒の生活実態調査報告

■報告者： 佐藤智水（龍谷大学文学部教授・龍谷大学仏教文化研究所長・BARC ユニット 3 リーダー）／志賀美和子

■開催場所： 清風館 301

■開催日時：12 月 7 日（火）16：45～18：45

【コメンテーター】長崎暢子／佐藤智水／志賀美和子

第５回ユニット１（南アジア地域班）研究会

共催：龍谷大学現代インド研究センター

■報告題目：Dharmakīrti and the Mīmāṃsakas in Conflict: *Pramāṇavārttika* (*svavrtti*) I.311-340

■報告者：ジョン・テイバー（John Taber, ニューメキシコ大学教授）

■開催場所：西黌大会議室

■開催日時：1 月 14 日（金）17:00～19:00

【コメンテーター】桂　紹隆

第６回ユニット１（南アジア地域班）研究会

■報告題目 1：タイ調査報告／国際エンゲージドブディズムネットワーク(INEB)に出席して

■報告者：嵩　満也

■報告 2：スリランカ調査報告／世界仏教徒大会に出席して

■報告者：中村尚司
■開催場所：清風館 301
■開催日時：1 月 27 日（木）16：30～19：00
【コメンテーター】佐藤智水／長崎暢子

第７回ユニット１（南アジア地域班）研究会
■報告題目：How to teach a Buddhist monk to refute the outsiders? Text-critical remarks on some works by Bhāviveka
■報告者：ヘルムート・クラッサー（Dr. Helmut Krasser, オーストリア科学アカデミー／アジア文化思想史研究所所長・ウィーン大学チベット学仏教学科講師）
■開催場所：西鬘大会議室
■開催日時：1 月 28 日（金）17:00～19:00
【コメンテーター】桂　紹隆

第８回ユニット１（南アジア地域班）研究会
■報告題目 1：Differentiating Dignāga: A Question of Identity in the *Prasannapadā*
■報告者：アン・マクドナルド（Dr. Anne MacDonald オーストリア科学アカデミー／アジア文化・思想史研究所研究員／沼田研究奨励金受給者・仏教文化研究所外国人客員研究員）
■報告題目 2：Three Yogācāra Texts on the Ideal Debater: *Yogācārabhūmi*, *Abhidharmasamuccaya* and *Abhidharma-samuccayabhāṣya*
■報告者：アルベルト・トデスキーニ（Dr. Alberto Todeschini ヴァージニア大学宗教学科博士課程修了／沼田研究奨励金受給者・仏教文化研究所外国人客員研究員）
■開催場所：清風館 301
■開催日時：2 月 18 日（金）16：00～19：00
【コメンテーター】桂　紹隆

第９回ユニット１（南アジア地域班）研究会
■報告題目：The Good Monk and His Wife are Seldom Parted: Reflections on Married Monks in Indian Buddhism
■報告者：シェイン・クラーク（Dr. Shayne Clarke, マクマスター大学社会科学部宗教学科准教授）
■開催場所：清風館 301
■開催日時：2 月 23 日（水）10：00～12：00
【ファシリテーター】桂　紹隆
【コメンテーター】井上綾瀬（BARC リサーチアシスタント）

ユニット２（中央アジア地域班）研究実績

ユニットリーダー
入澤　崇

１．本年度の研究目標

ユニット２は下記の３つのサブユニットから成り、中央アジア・チベット・モンゴルの仏教を研究対象とし、仏教学・歴史学・美術史学・情報工学が協力し合って最先端の学際的な研究をすすめる。当該地域に展開した仏教文化の跡を辿るとともに、仏教のもつ多様性と重層性のメカニズムを解明していく。とりわけ文化の接触、交流、融合といった点に注目し、現代社会における仏教の可能性について有効な提言をなすことを目的とする。

サブユニット１（宮治・入澤）では、大英博物館、ギメ美術館、ベルリン国立アジア美術館、敦煌研究院、アフガニスタン考古学研究所などの協力を得て、ガンダーラ・中央アジアに伝播した仏教文化を特に「仏教と異文化との交流」という観点から考察する。ガンダーラで仏像を中心とした新たなる仏教文化が生成した背景には、インド、ギリシア、ローマ、イランといった諸文化との混淆があり、ガンダーラ仏教文化を受け継いだ中央アジアでは仏教が異文化を包摂する様相が顕著にみてとれる。異文化が接触したとき、「文明の衝突」ではないあり様がいかにして可能であったか、そのメカニズムを解明していく。同時にこれまでほとんどふれられることのなかった仏教西伝の跡を追い、西アジアへの仏教伝播の可能性を追求する。

サブユニット２（村岡・岡田）では、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、ウランバートル国際遊牧文化研究所などの協力を得て、近年見直しを迫られているモンゴル帝国に焦点をあて、モンゴル帝国が被支配地域の文化を温存して発展を遂げていった様相を明らかにする。併せて、モンゴル帝国の世界認識を示す、龍谷大学所蔵「混一疆理歴代国都之図」に秘められた地理情報を情報工学の助力を得て引き出し、モンゴル帝国がいかなる世界観を有していたかを具体的に解明していく。地図は人間の世界認識を示すものであるが、須弥山を中心とする仏教的世界観と近代へと引き継がれることになる科学的世界観との相克をも射程圏に入れる。龍谷大学に所蔵されている古地図は多くの情報を有しており、とりわけアジアがどのように認識されていたかに関わる問題はプロジェクト全体に波及する。

サブユニット３（能仁・三谷）では、チベット及びその周辺地域で保持されている仏教信仰と、イスラーム化の中で途絶えてしまった中央アジアの仏教文化の諸相を文献学の立場から解明していく。前者については、中国蔵学中心との協力のもとに、現代に至るまで信仰の拠り所となっている高僧の化身（転生活仏）などについて調査研究を行なう。後者については、主として中央アジア出土文献の解読研究を進め、旅順博物館、大英図書館、ベルリン・トルファン研究所、イスタンブル大学図書館などの研究機関が所蔵する仏典写

本資料を調査し、写本研究の立場から仏教の多様性にアプローチしていく。

２．　平成 22 年度の研究実績とその概要

①ガンダーラを基軸として展開した仏教の拡がりを解明するための基礎調査を行なう。出土文物については大英博物館・ギメ美術館所蔵のガンダーラ美術、遺跡調査についてはトルコ・ヴァン湖周辺の石窟、及びモンゴルのエルデニゾー寺院を対象とする（サブユニット 1、2）
②大谷探検隊が中央アジアからもたらした仏典写本は主に旅順博物館と龍谷大学に所蔵されるが、そのうち旅順博物館所蔵の中央アジア出土漢字仏典の調査を行なう。また、古典籍デジタルアーカイブ化を進める（サブユニット 3）
③龍谷大学所蔵のアジア諸地域の古地図および、GIS 研究基盤としての広域 GIS システムの調査を行ない、年度内に可能にするとともに、研究進展に対応して収集される地図資料の集積化に努める（サブユニット 2）
④大谷探検隊の調査・研究の一環として、大谷光瑞のトルコでの活動をテーマとした国際学術会議に協力する（サブユニット 2）。

①　について

ガンダーラ美術の調査研究は**宮治**が行なった。仏教の多様化は仏像の出現によって加速する。仏像を取り巻く菩薩像、神像さらには供養者像に注目するならば、ガンダーラ仏教美術の世界はまさしく仏教の多様性を探るのに格好の研究資料となる。中央アジア仏教美術は主としてガンダーラ仏教美術を苗床とするので、ガンダーラ美術の基礎的研究が必要である。ガンダーラ仏教美術から中央アジア仏教美術への展開については、宮治があらましを「中央アジアの仏教美術」（『新アジア仏教史 05　中央アジア　文明・文化の交差点』所収、2010 年）で示した。なお、宮治は国内シンポジウム「中央アジアにおける仏教と異宗教との交流」（2011 年 2 月 26 日）の中で「中央アジアの仏教信仰と美術―涅槃図と兜率天の弥勒菩薩を中心に―」と題し発表を行なった。大英博物館・ギメ美術館所蔵のガンダーラ美術についてはリサーチアシスタントの**上枝いづみ**が近くワーキングペーパーにて研究報告を行なう。大谷探検隊がガンダーラよりもたらした仏教文物資料は現在旅順博物館に所蔵されているが、これについても**宮治・入澤**は本格的調査に向けて準備を進めている。

文物調査と並んで遺跡調査も仏教の多様性をうかがうための基礎的作業となる。中央アジアの仏教遺跡調査は 19 世紀末期から本格化するが、1902 年に始まった大谷探検隊の調査はわが国の仏教研究において新たな地平を切り拓くものであった。仏教を研究するうえでの遺跡調査の意義については**入澤**が第 1 回ユニット 2 研究会で「大谷探検隊とオーレル・スタイン」と題し発表を行なった。本年度の遺跡調査はモンゴル帝国時代のものを中心とした。モンゴル勢力がイラン・トルコに進出してうちたてた王国をイルハン王国というがイスラーム化したモンゴル勢力として名高い。近年イルハン王国時代の遺跡が発見され始めているが、イスラーム建築とは異なる遺跡が多い。イルハンのモンゴル勢力がイスラーム化する以前は大部分が仏教徒であることから、未知の遺跡は仏教寺院址の可能性を

秘める。モンゴル仏教はチベット仏教、中央アジア仏教、中国仏教のアマルガムであり、仏教の多様性を研究するうえで重要な研究対象となる。**入澤**はトルコ東部ヴァン湖に面したアフラットに残る石窟を調査した。アフラットには 800 以上の石窟が存在しており、1960 年代よりトルコのガジ大学チームによって調査が進められている。近年、石窟はイルハン時代の仏教石窟ではなかとの見解がガジ大学より提示され、入澤が基礎的な検証を行なった。調査の概要及びアフラット石窟研究の意義については近く公表する予定である。

モンゴルのエルデニゾー寺院については**村岡**（サブユニット 2）が調査を行なった。モンゴルに現存する最古の仏教寺院であるエルデニゾーはわが国では大谷探検隊が早くに注目し、第二次大谷探検隊の野村栄三郎が調査を行なっている。野村の調査記録は彼が採拓した碑文資料とともに極めて貴重で、村岡の調査は大谷探検隊の偉業を受け継ぐものである。成果の一端は第 2 回ユニット 2 研究会にて公表された。村岡が発表の中でふれたように、モンゴル帝国の首都カラコルムに関する 1254 年の記録によれば、偶像崇拝の寺院が 12、イスラームのモスクが 2、キリスト教会が 1 ほど存在していたという。偶像崇拝の寺院はその多くは仏教寺院とみなすことができる。複数の宗教が共存する状況はイスラーム化する以前の中央アジアと同じである。様々な宗教の共生を可能にした背景を探るという試みは、本研究プロジェクトに大きく貢献するものとなるであろう。

② について

旅順博物館所蔵の中央アジア出土漢字仏典の調査については**三谷**（サブユニット 3）が行ない、その成果の一端を第 1 回ユニット 2 研究会で公表した。三谷はすでに旅順博物館所蔵の非漢字資料の調査に乗り出しているが、今回の発表では漢字仏典に関する旅順博物館との研究成果のうち、浄土教テキスト 85 点を取り上げた。中央アジアにおける浄土教研究に一石を投ずるものである。トルファンで書写された生の漢字仏典を分析・研究することによってトルファンにおける中国仏教の受容の実態が明らかとなっていく。報告は今後行なわれる非漢字仏典（胡語仏典）の調査研究に大きな期待を抱かせた。三谷の研究課題は、仏教内部で複数の仏教が接触するとき、そこでいかなる変容が生じるのか、また仏教文化の多様性はトルファン社会にいかなる影響を与えたのかという問題にまで発展する。調査した仏典資料については、古典籍デジタルアーカイブ研究センターにおいてデジタル化が順調に進められている。

③ について

地図に関しては**岡田**が超高精細古地図画像集積による歴史地理情報システムの開発をすすめており、龍谷大学所蔵の混一疆理歴代国都之図、世界大相図、五天竺之図、大清万年一統地理全図、および 20 世紀初頭の陸地測量部地形図・東亜輿地図、島原本光寺混一疆理図、天理大明図などのデジタル地図画像の作成を行なった。併せて、GIS 研究基盤としての広域 GIS システムの調査を行ない、歴史地理情報システムとして必要な要件定義を終えた。超高精細古地図画像として集積した、混一疆理歴代国都之図および本光寺図、天理大明図の 3 図を対象とした実験システムの運用を始めている（別紙参照）。

④ について

トルコでは2010年が「日本年」に当たり、トルコと日本との交流に関する記念イベントが数多く行なわれた。その一環として、大谷光瑞に関する特別展がブルサとイスタンブルの2か所で開催された。大谷光瑞が晩年、トルコの産業育成に大きな貢献を果たしたからである。ブルサでの展示は主に**三谷**が関与し、イスタンブルの展示は主に**入澤**が協力した。本プロジェクトが目標に掲げる「現代における仏教の可能性」を追求するにあたり、晩年の大谷光瑞の行動は見直すに値する。停滞するイスラーム圏にあって仏教者が身を挺して「産業育成」にあたったということは、単なる偉人伝のひとこまに終わらせてはならない。光瑞が目指したアジア社会の経済的安定と人材育成は現代においても喫緊の課題である。

ブルサではブルサ市博物館で「ブルサにおける初のトルコ・日本産業提携：ギョクチェン家と大谷光瑞」（16 Sep 2010-29 Dec.2010）が行われ、オープニング記念シンポジウムに三谷がコメンテーターとして参加した（ワーキングペーパー　三谷真澄「大谷光瑞師のトルコにおける動向調査―ブルサ特別展に参加して」）。イスタンブルでは国立イスタンブル研究所で特別展「三日月と太陽 イスタンブルの 3 人の日本人　山田寅次郎　伊東忠太　大谷光瑞」（16 Oct. 2010 – 20 Feb.2011）が行なわれた。開幕イベントで行なった入澤のレクチャー「大谷探検隊とシルクロード」はトルコで大谷探検隊を知らせる初の試みとなり、日本年記念出版物『Kont Otani Kozui ve Türkiye 大谷光瑞と土耳古』に掲載された。

以上のように、本年度は当初予定していた研究目標をほぼ完遂できたといえる。さらに以下のような活動も行なった。内容はいずれも第1回目の全体集会で予告していたものである。

文化財保存の観点からのアプローチ

ユニット2では構想調書に記したように、文献資料のデジタル復元や美術考古資料の画像データベースの活用も考慮に入れている。いわば文化財科学の分野との連携である。とりわけ文化財保存学との連携は不可欠であり、そこから貴重な提言が期待できる。2010年7月に大英図書館と龍谷大学との間で、国際敦煌プロジェクト（IDP）における「中央アジア資料デジタル化に係る共同プロジェクト」の覚書が締結され、IDP-Japan＝龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センターの契約が継続された。それにあわせて、国際シンポジウムが行われ、岡田が全体のコーディネーターをつとめた。シンポジウムの一部門をBARCユニット2の第1回研究会（「大谷探検隊とIDP」）とし、三谷、入澤、そしてポストドクターの橘堂晃一が発表を行なった。

また、これも構想調書にうたわれているように、ユニット2は敦煌研究院やアフガニスタン考古局などとも連携する。第4回ユニット2研究会はオマラ・ハーン・マスーディ（アフガニスタン国立博物館館長）氏と樊錦詩（中国敦煌研究院院長）氏の参加を得て、「文化財がつなぐ仏教アジア」と題し、2010年12月21日に開催した（新聞記事参照）。ユニット2からは**岡田**が発表を行ない、**宮治**がコメンテーターをつとめた。アフガニスタン国立博物館、敦煌研究院、そして龍谷大学の文化財保存の取り組みが紹介されたが、このような試みは初めてのことで極めて貴重な研究会となった。アフガン側は敦煌の情報を知らず、敦煌側はアフガンの情報を知らない。ユニット2がはからずもネットワーキングの役割を果たしたことになり、今後も中央アジア仏教研究のハブとしての機能を高めていきた

い。

チベットの活仏研究

平成 25 年度に予定していたチベットの活仏に関する研究を本年度に繰り上げて行なった。**能仁**がダワ・ツェリン（中国蔵学中心宗教研究所副研究員）氏と共同研究を行ない、その成果は第 3 回ユニット 2 研究会で公表された。チベット仏教を特色づける活仏は、その成立・変遷の過程はこれまで必ずしも明らかでなかったが、ダワ氏による発表「チベットにおける活仏の位階制度について」で、有益な知見が得られた。活仏は宗教面のみならず、政治面にも大きな影響力をもつために、今後プロジェクトで「政治と仏教」が俎上にのぼる際には本研究が大きく貢献することになろう。中国蔵学中心との協力体制構築もユニット 2 の目標のひとつであったが、その礎ができたことを喜びたい。

京都新聞　2010 年 12 月 25 日



2010年(平成22年)12月25日　土曜日

ニュース　こう見る

時のひと

アフガニスタンの文化財修復に力を注ぐ

オマラ・ハーン・マスーディさん（62）

戦乱で数多くの文化財が被害を受けたアフガニスタン国立博物館長としてこのほど来日、京都市の龍谷大で講演し、「有史以前からの貴重な収蔵品10万点以上を有していた博物館の世界的な権威を取り戻したい」と訴えた。

博物館は1919年に設立。自身が勤務する30年あまりは、戦禍の時代でもあった。79年の旧ソ連侵攻に始まる混乱は文化財にも影響した。90年代には軍事基地にされた博物館が標的として破壊され、7割もの所蔵品が失われた。

しかし戦乱前に、バクトリア時代（紀元前3～同2世紀）の黄金遺産などをひそかに運び出していた。2003年に治安が回復するまで保管場所をだれにも漏らさず、窃盗団などから守った。

01年には、偶像崇拝を否定する当時のタリバン政権が、博物館の仏像類を破壊した。一部は政権の目を盗んで隠したが「知られたら命はなかったかも。だが長年博物館にいると、文化財が自分の子どものように思えてならない」と振り返る。

現在は博物館再建や文化財復元に力を注ぐ。厳しい経済状況の中、博物館に足を運べない国民が大半で、地方博物館の整備が急務と考えている。「文化財を失うことは、自国の歴史を失うこと。反対にいえば、文化財を救うことは歴史を救うことだ。命ある限り文化財を守っていきたい」。穏やかな笑顔の奥に、揺るがない決意が見えた。

（江藤均）

京都新聞　2010 年 12 月 26 日

アジア



敦煌の遺跡研究に意欲

文明の東西交流を示す貴重な仏教遺跡「莫高窟」が残る中国・敦煌の敦煌研究院長、樊錦詩（はんきんし）さん（72）がこのほど、京都市下京区の龍谷大大宮キャンパスで講演した。

北京大で考古学を学んだ後、東西交流史のタイムカプセルともいえる敦煌の研究を続けている。特に石窟年代学に関しては大きな業績を残した。1998年からは研究院長として500人の研究員を率いる。70代になっても「研究すればするほど、開拓すべき分野が多い」と小柄な体に意欲をみなぎらせる。

近年は中国の経済力上昇とともに遺跡への観光客も増えており、魅力をより分かりやすく伝えるため3D展示なども検討している。「石窟も人間と同じで年をとって弱ってきています。保存と公開をバランスよく進めていきたい」（江藤均）

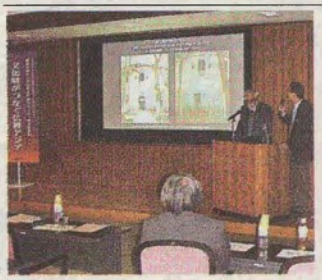
（平成22年）12月22日　水曜日　17版　社会2　22

文化財から仏教考える

下京 中国の研究者ら講演

文化財を通じてアジアの仏教文化を考える講演会「文化財がつなぐ仏教アジア」が21日、京都市下京区の龍谷大大宮キャンパスで行われ、アフガニスタンや中国の研究者らが保存の現状や課題について話した＝写真。

アフガニスタン国立博物館のオマラ・ハーン・マスーディ館長と中国敦煌研究院の樊錦詩院長、龍谷大の岡田至弘教授が講演した。マスーディ館長は1990年代の内戦により貴重な仏像などを多く保管する国立博物館が破壊され、7割近い文化財が失われたことや、その後の復興の様子をスライドを交えて説明し「文化財保護への国際的な支援も始まっており、今後も保存や調査を続けていく必要がある」と訴えた。



また樊院長は、敦煌に残る仏教遺跡が近年の観光客の増加によって石窟内の温度や湿度が変化し、壁が劣化するなど保存上の新たな課題が持ち上がっている現状を説明した。同大学が主催し、市民や学生約100人が耳を傾けた。（江藤均）

３．　ユニット２個人報告書

入澤　崇（ユニットリーダー／サブユニット１）

仏教と異文化との交渉に関する研究
仏教西伝に関する研究

１）トルコ・ヴァン湖周辺の石窟調査
２）トルコ日本年における大谷探検隊の展観・出版
３）『国際敦煌プロジェクト　研究シンポジウム』「大谷探検隊とＩＤＰ」部会＝第１回ユニット２研究会ファシリテーター及び研究発表
４）第２回ユニット２研究会コメンテーター
５）第４回ユニット２研究会ファシリテーター
６）第１回全体研究会コメンテーター、第１回国内シンポジウム「アジア仏教の現在」ファシリテーター、第２回全体研究会コメンテーター

１）

トルコ東部ヴァン湖の西湖岸に位置するアフラットで石窟調査を行なった。アフラットは 11 世紀から 12 世紀にかけてのセルジューク・トルコ時代に最も栄え、かつてはバルフ、サマルカンドと並ぶイスラーム三大都市のひとつ。13 世紀半ばモンゴルのイルハン王国がアナトリア地方を治める基地としたため、アフラット周辺にはイルハン時代の遺跡が多くのこる。中でも石窟の多さは目をひき（800 以上）、トルコ・ガジ大学チームは石窟の多くは仏教石窟である可能性が高いという。これまでトルコへの仏教伝播の事実は報告されていないだけに注目される。今回、ガジ大学が把握している地域以外のところでも石窟を確認した。調査の概要及びアフラット石窟研究の意義については近く公表したい。詳しい調査の必要性は認められるも、調査を今後遂行するにあたってはガジ大学との連携、トルコ政府の承認など難問が山積する。

２）

2010 年のトルコは「日本年」に当たり、トルコと日本との交流に関する記念イベントが数多く行なわれた。その一環として、大谷光瑞に関する特別展がブルサとイスタンブルの二か所で開催された。ブルサは三谷真澄氏が関与し、イスタンブルの展示は入澤が協力した。Istanbul Research Institute での特別展『三日月と太陽　イスタンブルの 3 人の日本人　山田寅次郎　伊東忠太　大谷光瑞』(16 Oct. 2010 – 20 Feb.2011）がそれである。開幕イベントで行なったレクチャー「大谷探検隊とシルクロード」はトルコで大谷探検隊を知らせる初の試みとなり、日本年記念出版物『Kont Otani Kozui ve Türkiye 大谷光瑞と土耳古』に掲載された。

３）

2010年7月13日に開催された国際敦煌プロジェクト（IDP）シンポジウムの部会「大谷探検隊とIDP」のファシリテーター及び、「大谷探検隊とオーレル・スタイン」と題する研究発表を行なった。大英図書館に本部をおく国際敦煌プロジェクトは中央アジア出土文物を保存する博物館、美術館、図書館、大学をネットでつなぎ、資料公開を目指すとともに、保存科学、歴史学、考古学、美術史などの複数の学問ジャンルから出土文物にアプローチがなされ、多彩な研究活動が展開されている。ユニット２の活動に大きな刺激を与えるものであり、今後とも密接な関係を維持していきたい。

４）

2010年12月9日に開催された第2回ユニット2研究会において村岡倫氏が行なった発表「モンゴル国最古のチベット仏教寺院エルデニゾー研究の現状とその意義」のコメンテーターをつとめた。

５）

2010年12月21日（火）に行われた第4回ユニット2研究会「文化財がつなぐ仏教アジア」のファシリテーターをつとめた。西のアフガニスタンと東の敦煌。両地域にみられる仏教文物は仏教の多様性をまぎれもなく示しており、ユニット２の研究活動に大きく関わる。今回の研究会では、アフガニスタンからオマラ・ハーン・マスーディ（アフガニスタン国立博物館館長）氏、敦煌からは樊錦詩（中国敦煌研究院院長）氏をお招きして、特に文化財保存の問題を取り上げた。ユニット２からは岡田至弘が報告を行ない、宮治昭がコメンテーターをつとめた。

６）

2010年6月8日に開催された第1回全体研究会において佐々木閑氏が行なった「多様化した仏教の現代的自律性について―オウム事件から何を学ぶか」に対するコメンテーターをつとめた。2010年10月9日に開催された国内ンポジウム「アジア仏教の現在Ｉ」でファシリテーターをつとめた。2011年1月13日に開催された第2回全体研究会において木村宣彰氏が行なった「中国における崇仏と排仏―なぜ、仏教は排斥されるのか―」に対するコメンテーターをつとめた。

以上が、2010年度の研究概要である。仏教西伝研究に関してはトルコで新たな知見が得られ、仏教と異文化との交渉に関してはアフガニスタンの文化財から多くのことを学んだ。親日国のトルコでの活動は、イスラーム圏に仏教研究を伝える絶好の機会となった。イスラーム圏でも仏教文化に関心を抱くものはかなりおり、とりわけシルクロードを導入として仏教に目を向けさせる手法は有効と感じた。21世紀における仏教の可能性を追求するにあたり、「仏教とイスラーム」という問題設定は今後大きな意味をもってくるであろう。その意味で本年度のトルコでの調査研究は得難いものとなった。シンポジウム、全体研究会、ユニット２研究会を通して多くの新視点が得られたが、それを次年度以降の活動に反映させていきたい。

宮治　昭（サブユニット１）

中央アジアの仏教美術の生成と変容
仏教美術における異文化受容の様相に関する研究

１）大英博物館・ギメ美術館所蔵のガンダーラ美術の作例調査研究
２）第２回国内シンポジウム「中央アジアにおける仏教と異宗教の交流」における研究発表、およびそれに関連した研究発表
３）第４回ユニット２研究会「文化財がつなぐ仏教アジア」コメンテーター

１）
ガンダーラを機軸として展開した仏教の拡がりを解明するための基礎作業として、2010 年は大英博物館、ギメ美術館所蔵のガンダーラ美術の作例を対象に、BARC ユニット２の研究目的の１つである仏教美術における異文化受容の様相の追究に沿って、主に弥勒信仰の作例を中心として分析、研究をすすめた。研究成果は２）と関連して２月 26 日（土）に開催される国内シンポジウムでの発表内容に反映される他、以下が挙げられる。
宮治　昭「ガンダーラ美術研究の現状」『国華』1385 号（2011 年３月）
なお研究成果として、2010 年度に大英博物館、ギメ美術館の作例を調査した BARC リサーチアシスタントの上枝いづみ氏より、BARC ワーキングペーパーに研究報告が投稿される予定である。

２）
2011 年２月 26 日（土）に開催される国内シンポジウム「中央アジアにおける仏教と異宗教の交流」では、宮治により、ガンダーラ美術の作例を取り上げながら「中央アジアの仏教信仰と美術―涅槃図と兜率天の弥勒菩薩を中心に―」と題して研究報告を行う。
この他、橘堂晃一（龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員）氏により「西ウイグル国の仏教　－弥勒信仰を中心に－」と題して、吉田豊（京都大学文学研究科教授）氏より「マニ教絵画の世界」と題して報告が行われる。これら多角的な報告から中央アジアにおける仏教美術の異文化受容の様相を明らかにする。
　これに関連した研究成果として以下があげられる。
　拙稿「中央アジアの仏教美術―弥勒信仰と美術・生死輪と宇宙的仏陀像・シルクロードの守護神たち―」『新アジア仏教史 05　中央アジア　文明・文化の交差点』所収、佼成出版社、2010 年 10 月
　拙稿「西域の仏教美術―涅槃の美術を中心に―」『西域の響き』所収、自照出版、2011 年３月予定

３）
2010 年 12 月 21 日（火）に行われた第４回ユニット２研究会「文化財がつなぐ仏

教アジア」にコメンテーターとして参加した。本研究会は、中央アジアの文化財保存と情報発信に携わる代表者である、オマラ・ハーン・マスーディ（アフガニスタン国立博物館館長）氏、樊錦詩（中国敦煌研究院院長）氏、岡田至弘（龍谷大学理工学部教授）の報告が一堂に会し、各方面の最先端の努力が紹介された貴重な機会であった。3 者の報告に対し、龍谷ミュージアムでの取り組みを紹介しながら、中央アジアの文物が訴えている事柄に対して学術的な研究を続けると共に，多くの人と共有できる形にしていく努力は続けられなくてはならないと総括した。

以上が、2010 年度の研究概要である。以上を通じてガンダーラ美術を基軸として様々な文化が混合し、新たに各地域において仏教文化を形成したあり方を再認識する機会に恵まれた。ガンダーラを基軸として展開した仏教の広がりを解明するための基礎作業は来年度も継続される。また、ミュージアムでの活動に連携して、仏教文化財を保存し伝える今後の可能性も明らかとなった。

村岡　倫（サブユニット２）

１）モンゴル国最古のチベット仏教寺院エルデニゾーの調査・研究
２）ドルノゴビ県ブレーニー・オボー遺跡の契丹文字碑文の発見
３）モンゴル国の仏教やその他の宗教事情の現地調査

１）

今年度は、2010年8月17日から24日の日程でモンゴル国での現地調に赴いた。モンゴル国側の協力機関である国際遊牧文化・文明研究所オチル氏、モンゴル国科学アカデミー歴史研究所のオユンジャルガル氏との調整で、実質、首都ウランバートルを離れての野外調査は、18 日から 22 日までの日程しか取れず、今年は、ハルホリン市のエルデニゾーへ直接行くことはできなかった。

しかし、エルデニゾー現地での調査自体は、報告者自身、これまでにも何度か行っているので、今回は、それを踏まえた上での、ウランバートルに在住するエルデニゾー研究者との研究交流を主な目的とし、モンゴル国科学アカデミー歴史研究所のハタンバータル氏（『エルデニゾー史』というモンゴル語の著書がある）、ウランバートル市ガンダン寺教育文化研究所所長ソニンバヤル・ラマの二人と会見することができた。2 人とは、エルデニゾーの歴史と現状について意見交換し、今後の研究課題について、いくつかの重要な示唆を得た。さらに、来年度以降の調査・研究での協力を確認した。

２）

今年度の野外調査における最大の目的は、モンゴル国東南部、中国との国境近くにあるドルノゴビ県サインシャンド市郊外のブレーニー・オボー遺跡の調査で

あった。オボーはモンゴル古来の宗教施設であり、その遺跡は漢文碑文を伴っているということで調査の対象とした。調査の結果、碑文は漢文ではなく、契丹文字の碑文であり、清寧 4 年（1058）の日付が確認できた。契丹国は、モンゴル帝国の前に、モンゴル高原を支配していた遊牧国家である。

契丹文字は、小字と大字の 2 種あるが、この碑文の文字は大字と考えられる。契丹文字は、現存する史料が少なく、いまだ完全には解読されていない。その中で、新たな史料の発見は大きな意義を持っていると言える。また、日付が確認されたということは、この碑は、契丹人の墓誌である可能性もあり、ブレーニー・オボーはその人物の墓を再利用したものである可能性も浮上してくる。契丹国は、熱心な仏教国であったことが知られており、墓陵であれば、その信仰形態を知る上でもたいへん重要な遺跡であると言えよう。

碑文の内容は、未解読の文字ということもあり、今のところ残念ながら日付以上のことは分からないが、今後は、契丹文字研究者との連携をはかり、その内容を解析したい。ブレーニー・オボー遺跡の調査は、発掘も含めて考えなければならず、考古学者との協力も必要であり、長期的な課題としたい。

なお、この契丹文字碑文の調査に関しては、近く、朝日新聞が文化面の記事として取り上げる予定である。

3）

その他、上記サインシャンド市内の博物館において、館員から、展示物の説明、ならびに、当地の仏教の歴史や現状、あるいは古くから遊牧民が信仰するシャーマニズムの歴史等の説明を受けた。

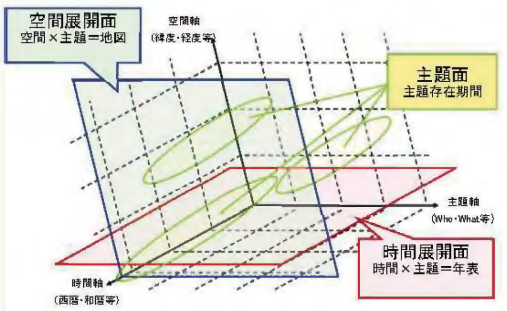
ウランバートル市でも、上記ソニンバヤル・ラマから、エルデニゾーに関することだけではなく、モンゴル国におけるチベット仏教の研究状況、仏教教育に関わる話を伺った。ソニンバヤル・ラマが所属するガンダン寺と並んで有名なウランバートル市内のチベット仏教寺院、チョイジン・ラマ寺院も参観し、現状調査等を行った。

岡田至弘（サブユニット２）

超高精細古地図画像集積による歴史地理情報システム

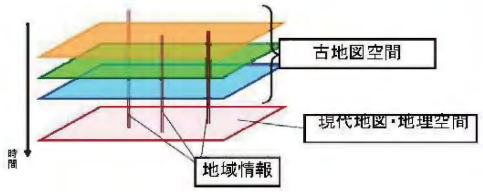
岡田 至弘

歴史地理情報システムの基本設計



超高精細古地図画像集積

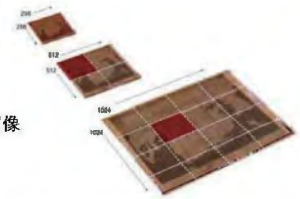
- 古地図および現代地図・地理情報の重畳
- 地域情報の付与
  - 地図の持つランドマーク
  - 関係資料の持つ主題情報



超高精細古地図画像表示

- 高解像度画像に対して
  - 正方タイル状に分割
  - 全体の解像度を落とす
  - 正方タイル状に分割
  - ・・・（繰り返し）

上記の工程を繰り返し
ピラミッド状の階層を持つ画像群を構築する



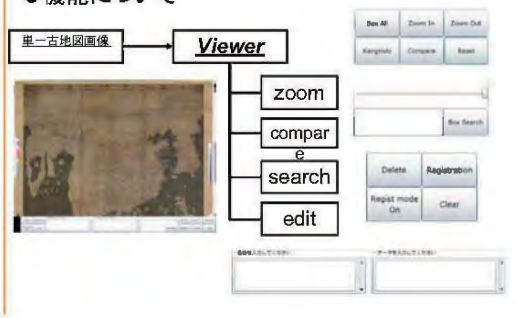
- 表示の際の特徴
  - 低解像度画像から読み込むため、広域表示をすばやく、画像転送に伴い精細度が向上する。





超高精細古地図画像管理の流れ

- 機能について



能仁正顯（サブユニット 3）

チベット仏教の展開と現状に関する研究

1）活仏に関する小研究会の実施

2）第 3 回ユニット 2 研究会のコメンテーター

1）

10 月 5 日、第 1 回小研究会を開催した。ダワ・ツェリン（中国藏学研究中心宗教研究所副研究員・龍谷大学仏教文化研究所客員研究員・沼田奨学金受給者）、李学竹（中国藏学研究中心宗教研究所副研究員）および能仁の 3 名で行なった。活仏は菩薩の化身とされる。例えば、親鸞や恵信尼が観音の化身とされるが、チベット仏教の「活仏」の概念と彼らの存在がどのように共通し、また異なるのかについて議論し、活仏の概念について検討した。

10 月 12 日、第 2 回小研究会を開催した。同メンバーが活仏の教義的背景について議論した。インド仏教における「不住涅槃」「大悲闡提」「仏身論」の概念をめぐって議論した。

12 月 7 日、第 3 回小研究会を開催した。12 月 16 日の研究発表に向け、タイトル・項目・内容について、日本語への翻訳やチベットの表記、あるいは個々の内容について検討を行なった。

2）

2010 年 12 月 16 日に開催された第 3 回ユニット 2 研究会においてコメンテーターをつとめた。発表者はダワ・ツェリン氏、発表題目は「チベットにおける活仏の位階制度について」。チベットの活仏はすでに 800 年の歴史をもつが、活仏の位階制度の実像については、文献資料が少なく、先行研究もほとんどないためその実態は未だ明らかではない。ダワ氏は、活仏と位階制度の歴史的変遷、位階の変動を中心に報告を行ない、現在の活仏をめぐる位階制度に至るまでには、歴史、外交、政治、経済的な背景が複雑に関連していることを示した。この報告は多種多様な活仏が活動し機能している状況を再認識させるとともに、従来の教理や哲学的な関心からの活仏理解に対して新たな視座を提供するものとなった。

三谷真澄（サブユニット3）

1）大谷光瑞のトルコでの活動をテーマとした国際会議に協力

2）大谷探検隊将来品の旅順博物館所蔵の漢文仏典調査を行う

3）古典籍デジタルアーカイブ研究センターと連携して、旅順博物館所蔵非漢字資料のデジタルアーカイブ化を進める。

4）IDP 会議、スダン先生の報告、ブータン国王女講演

1）

2010年は、外務省の「トルコにおける日本年」にあたり、2つの大谷光瑞師にかかわる特別展が開催された。これまで外国で光瑞師がとりあげられるケースはなく、海外初の展覧会となった。三谷は両方の企画に参画し展示品の学術情報提供を行った。特に、ブルサ市博物館で開催された「ブルサにおける初のトルコ・日本産業提携：ギョクチェン家と大谷光瑞」特別展については、開幕諸行事にも参加し、9月16日に同館で開催された学術シンポジウムのコメンテーターとして発言した。この間、ブルサ市だけでなく、イスタンブル市内を含むトルコにおける光瑞師の活動について調査し、関係者との交流を通じ多くの示唆を得た。

2）　について

2006年に出版した『旅順博物館所蔵トルファン出土漢文仏典断片選影』以降に判明した情報や、同時期・同地域を調査したドイツ隊の収集品の一部であるトルコ・イスタンブル大学図書館所蔵の漢文仏典写本の同定調査を行った。また、12月24日には、故百済康義教授と共に暫定目録を作成されたセルトカヤ教授と面談し、図録出版についての同意を得、2011年度中の刊行を目指して進めることになった。

3）　について

すでに2009年以来、古典籍デジタルアーカイブ研究センターと連携して、旅順博物館所蔵資料の非漢字資料をデジタル撮影し、ガラスに夾入され写本資料の紙色自体を再現するため、デジタル処理作業を開始している。また、2010年よりウイグル、ソグド、ブラーフミーなど各文字の担当者に依頼して、資料の同定調査に着手している。2011年度には、研究成果報告を公開する予定で準備を進めている。

4）　について

・IDP会議における発表・・・2010年7月に、大英図書館と龍谷大学との間で、国際敦煌プロジェクトInternational Dunhuang Project（IDP）における「中央アジア資料デジタル化に係る共同プロジェクト」の覚書が締結され、IDP-Japanの契約が継続された。併せて、国際シンポジウムが開催され、7月13日に、三谷は「龍谷大学と旅順博物館の非漢字資料－その意義と保存状況」と題する発表を行った。これまでの漢字資料の研究成果と現在進行中の非漢字資料に関する共同研究の中間報告を行った。

・ BARC会議のコメンテーター・・・10月9日に開催された「アジア仏教の現在Ⅰ」パネルディスカッションにおいて、スダン・シャキャ氏が行った「ネパール仏教の現状と課題」に対するコメンテーターとして参加した。現在のネパールは、インド由来の伝統的仏教のほか、チベット仏教、上座仏教の3つの仏教が共存している。その中で、信者レベルでの信仰形態について種々

議論された。

・ブータン王女講演会コーディネーター・・・当初の年次計画では盛り込まれていなかった、ブータン王女の講演会を共催した。これは、京都大学総合地球環境学研究所・京都府・京都市など7団体が主催する「KYOTO地球環境の殿堂」第2回表彰者として招待された第4代ブータン国王・ジグミ・センゲ・ワンチュック氏の名代として出席された、アシ・ケサン・チョデン・ワンチュック王女殿下による記念講演会である。講題は、「仏教国ブータン王国の国民総幸福度（GNH）政策—仏教思想の理念が国民総幸福度政策にどの様に活かされたのか —」であり、ユニット2関連事業として、三谷がトークセッションコーディネーターをつとめ、桂センター長や、鍋島直樹・人間科学宗教総合研究センター長にコメントや質問を依頼し、全体の統括を行った。GNH 政策を実行するための4つの柱、9つの領域、72の指標について紹介され、仏教国ブータンの取り組みが仏教の教義に根ざしたものであることが再確認された。

以上が、2010年度の研究概要であるが、概ね、当初予定していた学術研究は順調に遂行され、旅順博物館など世界に分蔵される中央アジア出土文献資料の同定調査を進めることができただけでなく、IDP会議やBARC会議、ブータン王女の講演会などを通して、アジア各地に展開している仏教のあり方を知る機会に恵まれ、今後の方向性をも占う有意義な1年であったと総括できる。

４．ユニット２研究会リスト

第１回　ユニット２（中央アジア地域班）研究会

『国際敦煌プロジェクト　研究シンポジウム』「大谷探検隊とIDP」部会

■報告者・報告題目：

三谷真澄「龍谷大学と旅順博物館の非漢字資料－その意義と保存状況」

橘堂晃一「契丹大蔵経とウイグル仏教」

入澤　崇「オーレル・スタインと大谷探検隊」

■開催場所：龍谷大学大宮学舎西黌2階大会議室

■開催日時：2010年7月13日（火）9:10～12:30「大谷探検隊とIDP」部会

（IDP日程：12日（月）13:00～16:20，13日（火）9:10～12:30，13:00～17:00）

■参加人数：120人

第２回　ユニット２（中央アジア地域班）研究会

■報告題目：モンゴル国最古のチベット仏教寺院エルデニゾー研究の現状とその意義

■報告者　：村岡　倫（龍谷大学文学部教授）

■開催場所：龍谷大学大宮学舎西黌2階大会議室

■開催日時：2010年12月9日（木）16:45～18:15

■参加人数：13人

【コメンテーター】入澤　崇（龍谷大学文学部教授）

第 3 回　ユニット 2（中央アジア地域班）研究会

■報告題目：チベットにおける活仏の位階制度について

■報告者　：ダワ・ツェリン（中国蔵学研究中心宗教研究所副研究員、龍谷大学仏教文化研究所客員研究員・沼田奨学金受給者）

■開催場所：龍谷大学大宮学舎西黌 2 階大会議室

■開催日時：2010 年 12 月 16 日（木）15:00～16:30

■参加人数：71 人

【コメンテーター】能仁　正顕（龍谷大学文学部教授）

第 4 回　ユニット 2（中央アジア地域班）研究会

『文化財がつなぐ仏教アジア』

■報告者・報告題目：

1. オマラ・ハーン・マスーディ（アフガニスタン国立博物館館長）
　「アフガニスタンの文化財」
2. 樊錦詩（中国敦煌研究院院長）
　「敦煌の文化財」
3. 岡田至弘（龍谷大学理工学部教授）
　「科学技術で甦る仏教世界」

■開催場所：龍谷大学大宮学舎清和館 3F ホール

■開催日時：2010 年 12 月 21 日（火）13:15～16:30

■参加人数：97 人

【ファシリテーター】入澤　崇（龍谷大学文学部教授）

【コメンテーター】宮治　昭（龍谷大学文学部教授）

ユニット３（東アジア地域班）研究実績

ユニットリーダー
佐藤智水

１．本年度の研究目標

本年度共通研究テーマ「変革期における仏教」

① インドから伝播した仏教が「形尽神不滅」「因果応報」「悉有仏性」「法身」等の新思潮によって人々に与えた衝撃とその反応から、中国人の初期仏教理解のズレを読み解いていく（サブユニット 1）
② 身分差別・貧困・苛政・天命観等によって発想を縛られていた人々に、人間としての目覚めを促す解放思想として仏教が浸透していく様態を明らかにし、それが 7 世紀以降どのように変化していったかを探る（サブユニット 1）
③ 三国～統一新羅時代の仏教教団の動向を探り、思想・信仰と社会との関係を研究する（サブユニット 2）
④ 律令体制下における僧尼令の成立過程や内容に関する資料を収集整理し、その機能等について問題点の整理を行う（サブユニット 2）
⑤ 中世以降の日本仏教の基調となる一乗思想の受容を最澄の事績を通して考察する（サブユニット 2）
⑥ 平安時代末期から鎌倉時代にかけて成立した、いわゆる「鎌倉仏教」について、政治権力との関係及び社会との交渉を考察する（サブユニット 2）
⑦ 近世・近代における仏教の社会的定着の過程を分析・検討し、その社会的機能を解明する（サブユニット 2）

２．本年度研究業績

サブユニット 1（中国）では、中国古代・中世（漢魏南北朝隋唐時代）において、民衆のエネルギーによって独創的展開を見せた中国仏教の諸相を明らかにするため、以下の報告を行った。

第 1 回 ユニット 3 研究会において、佐藤智水は「中国中世仏教の展開にみる社会史的意義－任継愈主編『中国仏教史』に対する一見解－」と題して報告を行った。佐藤は自身のフィールドワークを通じて、竺道生が先導した「悉有仏性」が身分制の枠を越え、民衆に極めて大きな影響を与えたことを指摘した。また「悉有仏性」「因果応報」などの思想を通して、民衆が自己に許された範囲で自らを解放し、それぞれの歴史時代において主体的に活動していた様子を、山西省太谷県塔寺石窟の例を取り上げて報告した。なお、本報告のコメンテーターは、中川修・長谷川岳史が務めた。

第2回 ユニット3研究会において、長谷川岳史は「中国における仏身観の展開とその多様性」と題して報告を行った。長谷川は中国における仏身観研究において、鳩摩羅什以前の仏身観の検討が不十分であることを指摘し、中国における仏身観の展開の起点として「老子化胡」説と「形尽神不滅」論に着目して、隋代の諸師の多様な仏身観を整理した。中国における仏教思想については、インドにおける思想的展開の影響下でそれを受容してきたと理解される傾向がある。長谷川は、インドから伝播した仏教の中国側の需要に基づく受容のあり方を読み解き、中国仏教思想史、あるいは日本仏教思想史の再構築の可能性について言及した。なお、本報告のコメンテーターは、佐藤智水が務めた。

以上の報告は、「形尽神不滅」「因果応報」「悉有仏性」「法身」などの思想を通して、中国初期仏教受容と民衆への浸透の様相を明らかにするものであり、本年度研究目標①②に該当する。中国仏教の独創性・多様性を考察する上で始点となる研究である。

また、佐藤智水・長谷川岳史・市川良文は、2011年2月26日から3月8日にかけて中国山東省において仏教石刻資料の調査を行った。この調査によって得られた成果の一部は、ワーキングペーパーとして報告を行う予定であり、また後述の中国仏教石刻研究会の基礎資料として利用される。

サブユニット2（朝鮮・日本）では、朝鮮および日本における仏教の果たした多様な役割と現代的可能性を明らかにするため、以下のような報告を行った。

藤能成は、2010年8月22日から9月3日にかけて韓国仏教の現状に関する現地調査を行った。そしてその調査内容に関して、龍谷大学アジア仏教文化研究センター設立記念シンポジウム「アジア仏教の現在Ⅰ」において、「韓国仏教の現状と課題」と題して発表を行った。藤は古代から現代に至る韓国の宗教政策の変遷を概観し、多様な宗教が混在する現代韓国における仏教教団のあり方や布教状況などについて報告した。調査結果および発表内容に関しては、藤がワーキングペーパーとして公開している。

また、藤は「仏智疑惑を超える道－元暁と親鸞の場合」（『印度學佛教學研究』59（1）、2010年12月）において、元暁と親鸞の説く仏智疑惑を克服する道を比較して、その共通性を指摘し、仏智とは人間をあるべき生き方へと導く普遍的な働きであることを指摘した。これは、新羅浄土教の先駆者である元暁と、鎌倉仏教の第一人者である親鸞の思想を対比することによって、仏教の普遍性を指摘するものであった。

藤の報告は、朝鮮の新羅時代と日本の鎌倉時代の仏教思想の展開を明らかにするものであり、本年度研究目標③⑥に該当する。また、「現代における韓国仏教の問題点とその可能性について検討する」という、ユニット3平成26年度研究目標とも関連する報告であった。

第3回 ユニット3研究会において、末木文美士氏（国際日本文化研究センター教授）は「天台本覚思想論」と題して報告を行った。末木氏は本学思想研究史を振り返り、研究者によって「本覚思想」の捉え方が様々であることから、本覚思想は必ずしも同一視できない違うタイプの思想動向の中にあるのではないかと指摘した。そこで末木氏は、日本中世の禅と密教の関係を指摘し、天台・禅・密教という広い視野からの本覚思想研究を試み、今後の天台本覚思想研究の方向性を提示した。なお、本報告のコメンテーターは、淺田正博が務めた。

末木氏の報告はこれまでの天台本覚思想研究を振り返り、本覚思想の諸相を明らかにす

るものであり、本年度研究目標⑤に該当する。また、末木氏の示した広範な視野に基づく天台本覚思想研究は、ユニット3の次年度以降の継続テーマである、日本天台における「一乗真実」確立の過程を分析・考察するための基盤となるものである。

第4回ユニット3研究会において、「日本における神仏習合の歴史的検証」と題した討論会が行われた。ここでは、「歴史学・仏教学・美術史学的観点から東アジア各地で展開した仏教の歴史的特質と現代的課題を探る」というユニット3全体研究目標と関連し、神仏習合の歴史的検証について各研究分担者が報告を行った。中川修が古代、下間一頼氏（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）が中世、山下立氏（滋賀県立安土城考古博物館学芸員）が美術、そして赤松徹真が近現代を担当した。

本研究会は、奈良時代から平安・鎌倉、そして近現代に至る「神仏習合」の展開に注目し、朝鮮半島や中国の事例と比較しながらその独自性を明らかにし、日本の宗教の特色である重層性を指摘するものであり、本年度研究目標④⑥⑦に該当する。また、「仏教の宗教的寛容性と日本社会への定着について考察する」というユニット3全体研究目標とも合致し、日本仏教の多様性を指摘するものであった。

以上、本年度の研究目標はおおむね達成され、次年度以降の継続テーマとなるものに関しては基礎的作業が完了した。更に以下に示すとおり、次年度以降の研究目標に関連する活動を行った。

第5回 ユニット3研究会において、寧欣氏（北京師範大学歴史学院教授）は「唐代城市寺院の社会功能及びその延伸」と題して報告を行った。唐代以降の寺院が単なる信仰のみならず、都市構造の中でどのような役割を担っていたのかという点を明らかにした本報告は、ユニット3平成24年度の研究テーマである「地域社会と仏教」と密接に関連し、僧と住民の関係、あるいは寺院の果たした役割や地域社会のネットワークを解明する上で重要な意義を持つ。なお、本報告のコメンテーターは、木田知生が務めた。

またユニット3では、研究の教育への還元および研究者育成の一環として、大学院生と学部生を対象とした「中国仏教石刻研究会」を定期的に開催している。本研究会は、特に仏教が中国の地域社会に普及し始めた重要な時期である、中国北朝時代の造像碑や僧尼の墓誌など仏教関係の石刻文を中心に取り扱い釈読を行っている。釈読を通して、中国における民衆仏教の展開を解明し、身分・民族を越えた人々の多様な仏教信仰のあり方を明らかにすることが本研究会の目的である。これは、ユニット3平成23年度の研究テーマである「国家と仏教」と関係し、君主・仏教・民衆の関係の推移を明らかにする上で基礎的な作業であり、次年度以降も継続して開催する。

３．ユニット３研究会リスト

第１回 ユニット３研究会

■報告題目：中国中世仏教の展開にみる社会史的意義
－任継愈主編『中国仏教史』に対する一見解－
■報告者　：佐藤智水（龍谷大学文学部教授）
■開催場所　：龍谷大学大宮学舎西黌２階大会議室
■開催日時　：2010 年 7 月 22 日（木）　13:15-14:45
■参加人数　：29 人
【コメンテーター】中川修（龍谷大学文学部教授）
長谷川岳史（龍谷大学経営学部准教授）

第２回 ユニット３研究会

■報告題目：中国における仏身観の展開とその多様性
■報告者　：長谷川岳史（龍谷大学経営学部准教授）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎西黌２階大会議室
■開催日時：2010 年 10 月 7 日（木）　16:45-18:15
■参加人数：37 人
【コメンテーター】佐藤智水（龍谷大学文学部教授）

第３回 ユニット３研究会

■報告題目：天台本覚思想論
■報告者　：末木文美士（国際日本文化研究センター教授）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎清和館３階ホール
■開催日時：2010 年 10 月 15 日（金）　15:00～16:30
■参加人数：160 人
【コメンテーター】淺田正博（龍谷大学文学部教授）

第４回 ユニット３研究会

■報告題目：日本における神仏習合の歴史的検証
■報告者　：中川修（龍谷大学文学部教授）＜古代＞
下間一頼（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）＜中世＞
山下立（滋賀県立安土城考古博物館学芸員）＜美術＞
赤松徹真（龍谷大学文学部教授）＜近現代＞
■開催場所：龍谷大学大宮学舎清和館３階ホール
■開催日時：2010 年 10 月 20 日（水）9:00～10:30
■参加人数：72 人

第５回 ユニット３研究会

■報告題目：唐代城市寺院の社会功能及びその延伸

■報告者　：寧欣（北京師範大学歴史学院教授）
■開催日時：2010 年 11 月 19 日（金）　15:00～16:30
■開催場所：龍谷大学大宮学舎西黌 2 階大会議室
■参加人数：51 人
【コメンテーター】木田知生（龍谷大学文学部教授）

中国仏教石刻研究会

第 1 回　報告題目：口洪徳造釈迦如来像記　※口は欠字
■報告者：桐原孝見（龍谷大学文学研究科修士課程）
　　吉岡慈文（龍谷大学文学部史学科仏教史学専攻 4 回生）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
■開催日時：2010 年 7 月 3 日（土）14:00～17:00
■参加人数：13 人

第 2 回　報告題目：北魏永安二年大覚寺元尼墓誌銘并序
■報告者：赤羽奈津子（龍谷大学文学研究科博士後期課程）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
■開催日時：2010 年 8 月 7 日（土）14:00~17:00
■参加人数：9 人

第 3 回　報告題目：大魏故昭玄沙門大統令法師墓誌銘
■報告者：倉本尚徳（アジア仏教文化研究センター博士研究員）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
■開催日時：2010 年 9 月 20 日（月）14:00~17:00
■参加人数：6 人

第 4 回　報告題目：劉未等造像碑
■報告者：桐原孝見（龍谷大学文学研究科修士課程）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室
■開催日時：2010 年 12 月 18 日（土）14:00～17:00
■参加人数：11 人

第 5 回　報告題目：僧暈等造像記／張道智造像記
■報告者：桐原孝見（龍谷大学文学研究科修士課程）
　　佐藤智水（龍谷大学文学部教授）
■開催場所：龍谷大学大宮学舎南黌 102 教室
■開催日時：2011 年 1 月 10 日（月）14:00～17:00
■参加人数：11 人

第 6 回　報告題目：馬鳴寺根法師碑

■報告者：高橋亮介（龍谷大学文学研究科博士後期課程）

■開催場所：龍谷大学大宮学舎仏教史学合同研究室

■開催日時：2011 年 2 月 5 日（土）14:00～17:00

■参加人数：9 人